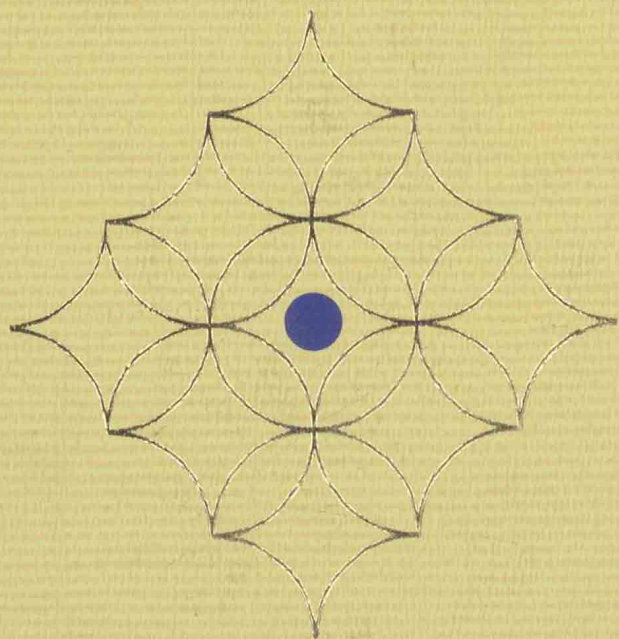




現代日本文學大系

95

現代句集

現代日本文學大系 95

昭和四十八年九月二十五日 初版第一刷発行

現代句集

著者代表 萩原 井 泉水

発行者 井 上 達 三

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑 摩 書 房

郵便番号一〇一―一九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷 株式会社 精興社 製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0392 (製品) 10095 (出版社) 4604

目次

巻頭写真

富安風生篇

草の花

六

芝不器男篇

不器男句集

三

内藤鳴雪篇

鳴雪句集

三

川端茅舍篇

川端茅舍句集

七

村上鬼城篇

鬼城句集

六

松本たかし篇

松本たかし句集

一〇三

尾崎放哉篇

大空

四

渡邊水巴篇

白日

二七

前田普羅篇

普羅句集

五

中塚一碧樓篇

一碧樓一千句(抄)

三

阿波野青畝篇

万両

六

原石鼎篇		白田亞浪篇	
花 影	二五	定本亜浪句集	二五
星野立子篇		日野草城篇	
立子句集	二七	旦 暮	二七
種田山頭火篇		野見山朱鳥篇	
草木塔	二六	曼珠沙華	二六
三橋鷹女篇		橋本多佳子篇	
魚の鰭	二三	紅 絲	二九
富澤赤黄男篇		西東三鬼篇	
天の狼	三六	今 日	三〇
山口青邨篇		細見綾子篇	
雪 国	二三	冬薔薇	三一
高野素十篇		篠原梵篇	
初 鴉	二七	雨	三三

金子兜太篇		石川桂郎篇	
少年	三九	竹取	四三
澤木欣一篇		森澄雄篇	
塩田	三四	花眼	四七
飯田龍太篇		野澤節子篇	
童眸	三五	鳳蝶	四九
石原八束篇		荻原井泉水篇	
空の渚	三六	大江	四六
角川源義篇			
秋燕	三七	〔付録〕	
秋元不死男篇		解説	山本健吉 四七
万座	三九	年譜	五〇五
加倉井秋を篇			
真名井	四二		

現代句集

内藤鳴雪篇

鳴雪句集

緒言

此の集を出すに方つて、子規居士と余との關係を思ひ出さずに居られぬ。居士は余の俳句の指導者である。而して是れは誰れも知る所で、今、改めて言ふの要もないから嘗て居士の生前に余の物した一二の文を摘記して、いさゝか今昔の感を叙する代りとした。

憶ふ昔と云ふ程でもないが、明治二十五年の一月其頃寄宿舎に居た子規子始二三の人が俳句と云ふものを作るので、僕も少々真似がして見たくなつて、

四十五の夢をさまして初日の出

元日や仏に成るも此の心

と遣つたが、どうも恥しいので人に見せられない。其後暫くたつて、一寸子規子に見せた。すると、是はほんたうの発句になつて居て中々面白い、と意外の賞賛（実は奨励）であつたので、僕も遂に乘氣が出来て来た。それから宿題や競吟などと毎日のやうに勉強して、拿百句唐辛子百五十句などと随分沢山作つた。然るに諸子からは余り評判が好くないのみならず、自分で今度は出来たと思つた句が不首尾で、是れはいけないと思つた句にお点がつく。一向何の事か分らない。少々腹も立つて来た、畢竟するに標準と云ふものがなかつたからで、ありやうはまだ一部の句集も熟読して居なかつたのである。そこで、どうかして一番諸子の意表に出る進歩がして見たく、それには古人の句集を読むのが好からうと思ひ、其頃諸子仲間で猿蓑を貰んで居ることを知つて居たから、内々之を研究した。其傍に作つた句が、

山寺は松より暮るゝ時雨かな
しぐるゝや母屋の小窓は薄木夜
初霜を戴き連れて黒木壳

から／＼と日は吹き暮れつ冬木立
吹きはづす板戸の上を霰かな

此外まだ四五句もあつたらう。或る日之を子規子に見せて、今度は責任を以て作つた、批難があるなら答弁すると冗談半分に云つ

た。そこで子規子につく／＼と吟じて居たが、頗る御機嫌顔になられて、成程是は大分様子が變つた、どれも面白い、どうしたのかと問はれたから、実は内々猿蓑を読んだと白状して大笑ひになつた。是が何でも同年の十月頃であつて、やつと諸子の仲間入が出来たのである。其後二三年間、即ち碧子虚子々などの勇將が現はれて来るゝまでは僕も少々威張つて居た。（ホト、ギス三十二年七月号碧子の俳句評釈の文中摘記）

僕は子規子に對して、年齢と經歷とに於ては郷里の長者先輩である。寄宿生としては監督したこともある。又漢詩を添削したこともある。是が今以て子規子より翁又は先生の称呼を甘受せねばならぬ所以である。併し、人も知る如く俳句に於ては僕は子規子の徒弟である。子規子は僕の師である。先達である。兎も角も僕が今日俳人否俳人らしく人に云はるゝやうになつたのは全く子規子の賜である。子規子なかつせば僕は勃率たる理窟一点張の人で終はるのであつた。故に内藤素行を生んだのは父母で、内藤鳴雪を造つたのは子規子である。尤も其教を受けたと云ふも、諄々然として講明し、俛焉として聴従したと云ふでもない。毎々団欒して句作したり、又句の批評を受けなとして屢々蒙を啓いたことは勿論であれど、此外多くは意見が衝突して議論したのであ

春之部

時候

人事

天文

二月 梅散りて鶴の子寒き二月かな

春 寒 柑子むく妹が爪先春寒し

日 永 永き日や鈍太郎殿の手車

文殊語り舍利弗眠る日永かな

伐り出だす木曾の檜の日永かな

暖 か 暖かや君子の徳は風なれば

春 夕 瑞離や狐子を生む春の夕

春 宵 臥し慣れて左枕や宵の春

春 夜 春の夜の靱つくろふ女かな

春の夜の刀預る恋もあり

春の夜の鳩のうめきや絵天井

菜の花に隼一里や嵯峨の寺

行 春 行春の鴉啼くなり女人堂

行春の召させ参らす草鞋かな

夏近し 川上に鶯啼きて夏近し

彼岸 乞食の子も孫もある彼岸かな

爺婆の蠢き出づる彼岸かな

曲 水 盃の花押し分けて流れけり

雛 古雛の衣や薄き夜の市

其中にほうこ雛の寒げなり

一年や虫糞払ふ雛の衣

地震ふつて雛天上より落ち給ふ

紙 薦 落ちもせで旋風の中の紙薦

パチンコや暮れ行く風のあり所

大風の静かに下る雨の中

出 代 出代の下女も祇王と伝かな

出代りてこゝに小梅の茶店かな

踏 青 踏青や裏戸出づれば桂川

山畑は月にも打つや真間の里

日あたりや江戸を後ろに畑打つ

沙 干 狩 旅人の沙干見て行く馬上かな

壺 焼 壺焼の壺傾きて火の崩れ

淡 雪 淡雪に月も二日のあはれなり

春 風 曳き連るゝ恩賜の駒や春の風

陽 炎 陽炎や石の八陣潮落ちて

陽炎に昔の夢や平家蟹

春 雨 春雨や酒を断ちたるきのふけふ

春雨に杉苗そだつ小山かな

景清の番傘さして春の雨

春雨や蓬の宿の白拍子

春雨に牛やるといじもいじかな

春の月 片側は雪積む屋根や春の月

小菰に人のけはひや春の月

朧 月 朧月釣する蟹の小唄かな

朧月千人斬の噂かな

浅茅生の宿と答へて朧月

地理

山 笑 ふ 夕嵐山は笑はずなりにけり

春の川 春の川手紙まろめて流しけり

水 温む

桶に浮く丸き水や水ぬるむ

焼 山

焼山の齒朶はちく／と終夜

焼 野

野は焼けて妻と籠らん蔭もなし

苗 代

子鴉や苗代水の羽づくろひ

苗代に夕風渡る緑かな

動物

猫の恋

玉とつてまだ恋知らぬ小猫かな

恋猫や鮑の貝の片思ひ

猫塚に恋草生ふる小雨かな

鶯

鶯に朝飯遅き下宿かな

鶯に禄賜はりし初音かな

鶯の声聞きしより妻孕み

鶯の太根畑に初音かな

二羽打ちて啼かずなりたる雉子かな

雲 雀

子雲雀や比叡山嵐起ちかぬる

檜扇に招きかへさん揚雲雀

帰 雁

俱利伽羅の雪やなだれん帰る雁

嘲 り

嘲りのひねもす南枝北枝かな

雀 子

雀子や走りなれたる鬼瓦

若 鮎

若鮎のそれほど水は早からず

子

若鮎の小石がくれにこゝかしこ

さざ波や古き都の初諸子

汁椀に大蛤の一つかな

蝶々の暮ふ花輪や棺の上

城門に蝶の飛び交ふ日和かな

蜂王の都遷しや花の暮

葉がくれに白う肥えたる蚕かな

里の女や蚕飼の神の朝詣

庭の木に山繭買ひし葉のこぼれ

植物

夕月や納屋も既も梅の影

灯ともして夜行く人や梅の中

野の梅や折らんとすれば牛の声

鉢に咲く梅一尺の老木かな

垣越えて梅折る人や明屋敷

梅散りて狐啼くなり経王寺

白梅は兄紅梅は姉にこそ

胡砂吹くや梅なき国の皆守

招牌や銭とる家の梅の花

紅 梅

紅梅や左府の大臣の牛車

浜寺や紅梅褪せて雨多き

紅梅や司たまはる古匠

大木の椿咲きけり山社

奈良阪や桜に憩ふ油売

山寺はお茶一碗の桜かな

小謡や桜月夜の二条衆

賭弓や女もまじる山桜

人恋し夕山桜黒本尊

遠乗や桜かざゝぬ人もなし

懐中の二分に桜の夜明かな

夜嵐や桜散り込む鐘ヶ淵

風呂の戸を出れば桜吹雪かな

炭竈は雨にくづれて遅桜

牛の角すばめて通れ花の中

花一山紫衣の僧あり若衆あり

山門や左右に花の十二坊

花暮れて二条わたりの犬の声

朝の雨花は一重ぞ衰れなる

帯かばふ女心や花の雨

火熨斗する花見衣やよべの雨

散る花に内道場の灯かな

桃

伴僧が味噌に摺込む落花かな
掃き落す屋根も離も落花かな
税輕き十戸の村や桃の花

一村を日に蒸しこめて桃の花

うたゝ寝の覺むれば桃の日落ちたり

桃の小径手拭首に里女

梨の花

北面に歌召されけり梨の花

下京や鬼出る家の梨の花

李の花

人吝き隣の李咲きにけり

子鴉の母呼ぶ李月夜かな

銀杏の花

銀杏の花や鎌倉右大臣

木蓮花

此門の勅額古し木蓮花

躑躅

躑躅ぬけば石ころ／＼と転がるよ

雉の子を追ひつまくつゝ躑躅かな

明樽の躑躅淋しや二百文

躑躅活けて女経読む山の中

木瓜の花

木瓜の花土手に喰ひ入る夕日かな

柳

船曳のあたまで分ける柳かな

船人が米とぐ岸の柳かな

荷車の柳曳きずる埃かな

橋の柳雪駄直しの日は落ちぬ

とらまへて衣売る店の柳かな

山吹

山吹の雨に灯ともす隣かな

菜の花

菜の花や絵馬つけて行く小荷駄馬

菜の花や唄面白き菜売

花大根

清正の木遣音頭や花大根

水草生ふ

水そよ／＼池の水草生ひそめぬ

竹の秋

竹の秋月に小督の墓掃かん

春草

公事勝ちし己が畑や春の草

海苔

新海苔の亀朶による波よるさへや

雑

賺されし笑葉や春の宿

夕月やこゆるぎ戻る春の人

烏帽子著て舟さす人や春の池

俳句大観に題す

大千や爛々として春の星

天明俳句集に題す

中興の春や一草一木も

無常

此春は風飛ばしたる人もなし

波字春季結

天地丸日永の波に浮かべけり

梅若忌

春雨の一日は稚児に泣く日かな

此頃の志士が口真似して

炭を嘗め薪に臥す世ぞ二日灸

戦死せし某の遺吟を整理して

落椿赤き心を拾ひけり

上野にて

初花や西郷どんは尻向けて

品川

誰が占めて天王山の花の幕

借葉園

一泉一石昔ながらの桜散る

紅緑の新婦に

偕に寝て桃の日雨の暖く

俳調の変易に感じて

菊は古るし人形つくる躑躅かな

俳諧月令箋に題す

月花や人生三万六千日

夏之部

人事

帷子 帷子の洗ひ晒しや三葵

羅 くらへ合ふ帷子の絵や禿どち

夏帽子 羅を曳くや天女の天津風

日傘 さしつれて若紫の日傘かな

蚊帳 釘うつて蚊帳吊る主まうけかな

何すねて日高き蚊帳に妹一人

暁の片足出たる蚊帳かな

十哲のあたま集むる蚊帳かな

夕月や蚊帳の浪よる妹が顔

風入れて揺き出でたる紙帳かな

扇 よき人の襟にさしたる扇かな

五六本物書きすてし扇かな

新茶 新茶煮て此緑陰の石を掃ふ

鮓 鮓つけて真清水に手を洗ひけり

葛水 葛水や百雷騰を下りけり

梅酢 揉み出だす唐紅の梅酢かな

天文

五月雨 五月雨の狐火うつる小窓かな

大海のべたり／＼と五月雨

時候

五月 大沼や蘆を離るゝ五月雲

一笠の首途は安き五月かな

短夜 短夜の麓に余吾の海白し

短夜や蓬が上の廿日月

カンテラや明易き夜の道普請

短夜を援兵急ぐ山路かな

短夜や百万遍に朝日さす

夏の夜 夏の夜を物喰ひ過ぎて寝苦しき

午睡さめて尻に夕日の暑さかな

竹の根の蟬となりたる暑さかな

涼 涼しさや魚とる蝦夷がうつろ舟

涼しさや妹が水干立烏帽子

遺言も涼しき老の枕なか

轆 矢車に朝風強き轆かな

殿原が馬で見て行く轆かな

初轆こゝにも日本男児あり

菖蒲湯 灯のさして菖蒲片寄る湯槽かな

矢数 大矢数太郎いまだ冠せず

田植 入海や磯田の植女舟で来る

竹植る 植ゑ終へて縄ほどきたる葉竹かな

夜振 町中や夜振戻りの頬被り

蟲干 蟲糞や本箱叩く土用干

納涼 夜納涼や糺の川辺人白し

川床に女負ひ行く納涼かな

江樓に納涼の宴や燭あまた

海中の岩飛びわたる納涼かな

滝殿 滝殿に人あるさまや灯一つ

行水 行水の巫女に慣れよる小鹿かな

青簾 青簾鯉の庖丁見そなはす

青簾 青簾有馬細工を並べたり

竹婦人 入道の裸うとまし竹婦人

更衣 更へ／＼我世は古りし衣かな

出水して橋守る声や五月雨

五月雨の荷物著きたる戸口かな

五月雨や蓑笠集ふ青砥殿

五月雨に燭して開く秘仏かな

五月晴 大船の白帆干したり五月晴

夕立 日は峰に夕立つ杉の木の間かな

青嵐 青嵐云ふ師は薬を採り去ると

風薫る 風薫る袖や社参の那須七騎

雲の峰 雲の峰裏は明るき入日かな

雷 池に落ちて水雷の咽びかな

地理

夏山 夏山の城ありく〜と夜明けたり

夏山の大木倒す筈かな

青田 門残る侍町の青田かな

堰き入るゝ青田の水に目高かな

清水 山僧の太刀洗ふ清水かな

野狐の尾をひたし去る清水かな

ばた〜と鴉むれ居る清水かな

動物

時鳥 月がさす厠の窓や時鳥

時鳥遠侍の軒かな

蝙蝠 蝙蝠の昼飛ぶ塔や五智如来

金魚 貫ひ来る茶碗の中の金魚かな

螢 船頭の夕飯照らす螢かな

蚤 朝夷奈の蚤とりかぬる鎧かな

水馬 水馬一つ処を上りけり

水馬かさなり合うて流れけり

蝸牛 でゝ虫の角に夕日の光りかな

植物

百日紅 怠らぬ棒の稽古や百日紅

若葉 切り据えて桐ふし〜の若葉かな

生垣の梢そらはぬ若葉かな

葉桜 葉桜や田舎見たさの初瀬籠り

夏木立 駆けぬける汽車の風や夏木立

与謝の海や藍より出でゝ夏木立

松落葉 掃き寄せる松の落葉や鹿の糞

青梅 垣越しに梅の実くるゝ女かな

林檎 盛物に林檎のつやゝ仏の灯

若竹 二日月うら若竹の影もなし

牡丹 臨幸を乞ひ奉る牡丹かな

大妓小妓起き出でゝ牡丹日午なり

牡丹画く筆端に紅の雫かな

茨の花 茨垣の夏知る一花両花かな

雨晴れて茨に夕日の二三尺

紫陽花 思ふ事紫陽花の花にうつろひぬ

蝦夷菊 蝦夷菊や古き江戸絵の三度摺

星顔 星顔や蓬の中の花一つ

夕顔 夕顔や馬洗ひ居る武士の妻

葛の花 玉葛の花とも云はず刈り乾しぬ

菖蒲 村雨の菖蒲分け行く田舟かな

花菖蒲物の具したる女かな

蕁 木蘭の櫛にもつるゝ蕁かな

手を以て舟やる池や蕁生ふ

夏草 夏草に屋根切り組みし空地かな

買臣が錦に麦の埃りかな

蓼 蓼摘て厨へ走しる少女かな

麻 麻畑百姓ありて欠びかな

雑

桐芽の男子をまうけたるに

五月鯉吹き出だしたる此子かな

人を悼む

五月雨に濡れて飛び行く魂もあらん

牛伴送別

行雲や五十三亭さみだるゝ

定靖君の新館

此窓に何読み給ふ若楓

上野徳川廟

夏木立五代の御霊鎮まりぬ

秋之部

時候

七月 癒落ちて文月の夜の灯かな
 立秋 目薬に涼しく秋を知る日かな

初秋 初秋の折ふし須磨の便りかな
 朝寒 朝寒や三井の仁王に日の当る
 夜寒 寝返れば夜寒の簀子音すなり

提灯で見るや夜寒の九品仏
 山越えや馬も夜寒の胴ぶるひ
 此道に石泣くといふ夜寒かな
 戸の外に折檻の子の夜寒かな
 馬方の馬に物云ふ夜寒かな
 湖に山火事うつる夜寒かな

夜長 つくゝと古行燈の夜長かな

襖画の女物言はぬ夜長かな

異見すんで子の立ち去りし夜長かな

長き夜や僧となるべき物思ひ

一日の日記しるして夜長かな

秋日和 難船の物干す秋の浜日和

秋晴 秋晴れて五重の塔の掃除かな

二百十日 堂嶋や二百十日の辻の人

行秋 行秋に狐つきたり鍛冶が弟子

行秋や不破の関屋の白の音

行秋の天西南に傾きぬ

人事

七夕 七夕を寝てしまひけり小傾城

押し立てゝ早散る笹の色紙かな

呼びつれて星迎へ女や小磯まで

魂祭 魂祭吾れは親より老いにけり

魂棚の前に飯喰ふ子供かな

魂棚の飯に露おく夕かな

墓参 墓拜む後ろに高き芒かな

提げて行く燈籠濡れけり傘の下

燈籠 燈籠も二つ比翼の誓ひかな

燈籠や僧の留守する古女

流燈会 面白白魂も灯も流るゝよ

走馬燈 酔眼の況んや廻り燈籠かな

撰待 撰待に女具したる法師かな

秋の蚊帳 つゞくりの遂に破れて秋の蚊帳

新米 新米に娘も売らでとりつきぬ

新米 新米の俵も青き貢かな

踊 両刀を人に預けて踊りけり

母酔うて古き手振りの踊かな

鬼若も山を下りて踊かな

